

認知症介護の三原則（一九七三年）

私が認知症を生涯の課題にしようと思いついた時には、すでに山本病院にも認知症の患者さんがいらっしゃいましたので、まず、どのような患者さんが良くなられ、どのような症例がどんどん悪くなってゆかれるのかを、観察することから始めました。

その結果、毎日が楽しくて幸せにお過しの患者さんは良くなられ、日々悲しくてゆううつに沈んでいらっしゃる症例は悪くなることが、分かりました。

そこで、認知症の患者さんを幸せにするための「認知症介護の三原則」を作りました。

いつも暖かな愛情と優しいいたわりを持って

忘れてしまってなんども同じことを尋ねるのに、「なんど同じことを聞くんだ。」と怒鳴りつけたり、おもらしをして着物や布団を汚される度に、「赤ん坊じゃあないんだからしっかりしろ。」と、お尻をひっぱたいたりしますと、認知症はみるみる悪くなってゆきます。

もの忘れも、おもらしも、すべて認知症の症状でして、カゼをひいた時の鼻水や咳と同じで、自分ではやめられないことをまず理解して、年をとってから大変に辛い病気にかかれたお年寄りに、暖かい愛情と優しいいたわりを持って接することが必要なのです。

決って叱らず制止せずいつも自由に

不潔なことや危険なことをしようとなさっている患者さんを見かけた時に、そんなことをするなと叱ったり、ダメと制止しますと、患者さんは怒ったり、悲しんだりされて、認知症は必ず増悪します。

それよりも、その人がもっと喜ぶことをするようにお勧めすることで、不潔なことや危険なことをなさらないよう、うまくかじをとることが重要なのです。

例えば、便こねなさっているのを見つけても、「ダメ、そんなことするな。」と叱るのではなく、「美味しいもなかがあるから召し上げて下さい。」とおすすりめし、召し上がる前に手を洗っていただき、もなかを楽しんでいらっしゃる間に、汚物を片づけるようにしましょう。

今できることでまわりに役立つ働きをしていただく

自分は全くの役立たずだと感じるほど、辛く悲しいことはありません。

たとえ寝たきりでも、ぼけていても、自分がまわりの人に役立つ働きができると感じら

れることが大切なんです。

だから、その患者さんが現在何ができるかを探し出して、それをやっていただくようにおすすめし、やっていらっしゃる間に、絶えず褒め続け、感謝の言葉をかけてあげますと、病状は良くなります。

脳が働くエネルギーの原料はブドウ糖だけでして、そのブドウ糖に酸素が作用して、脳の働くエネルギーを作っていますが、脳にはブドウ糖も酸素も貯えはありませんから、絶えず補給し続けなければならないのです。この補給を担当しているのが、頭への血のめぐりですから、頭の血のめぐりの良し悪しが、頭の働きを左右しています。

頭の血のめぐりは、幸せで楽しい時には良くて、ゆううつで悲しい時には悪くなります。

だから、認知症を良くするためには、楽しく幸せにお過ごしいただくようにして、頭の血のめぐりを良くすることが大切です。